

写真-1 千鳥橋から上流を望む（平成 25 年 9 月撮影）

■ 加古川の派川・洗川の履歴

上の写真-1 を撮影した場所は「千鳥橋^{*1}」。その親柱の一方には、「法華山谷川（ほっけさんたにかわ）」の銘板が取り付けられています。そして、千鳥橋の上流約 200m に架かる橋は一般県道 718 号明石高砂線（旧国道 250 号）の「千鳥大橋」ですが、親柱には「洗川（あらいかわ）」の銘板が。わずか 200m 離れて河川名が異なっています。

今回は洗川から法華山谷川に河川名が変更された経緯を追うとともに、洗川の名残りを探してみようと思います。

加古川本川は、明治 44（1911）年 9 月 10 日から河川法適用河川（旧河川法：明治 29 年施行）となっています。その加古川の派川であった洗川は以下の経過をたどります。

（加古川水系洗川）

- 明治 45（1912）年 4 月 5 日県告示第 145 号により加古川の派川認定を受ける。
（印南郡米田村の加古川分派点以下、海に至る区間）
- 昭和 5（1930）年 3 月 31 日県告示第 196 号により 4 月 1 日から法華山谷川を準用河川認定
（加古川水系の一員となる。）
- 昭和 12（1937）年 5 月 18 日県告示第 469 号により加古川の派川認定を廃止
（加古川改修により、分派点が築堤および洗川樋門により締め切られたためか、それにしては廃止認定がちと遅いような…）

（洗川水系洗川）

- 昭和 12（1937）年 5 月 18 日県告示第 470 号により準用河川認定（洗川樋門から海に至る区間）
（これ以降、洗川水系となる。当然のことながら、法華山谷川も洗川水系に変更となる。）
- 昭和 40（1965）年 3 月 31 日県告示第 349 号の 4 号により洗川の準用河川廃止

(法華山谷川水系法華山谷川)

- ・昭和 40 (1965) 年 3 月 31 日 県告示第 349 号の 5 号により法華山谷川水系となる。
(印南郡志方町畑の地藏橋以下海に至る区間)
- ・昭和 40 (1965) 年 9 月 10 日 県告示第 902 号により同年 4 月 1 日から自動指定により二級河川となる。
(告示日を遡っている。)

※1 千鳥橋：初代の橋は、法華山谷川の河口部を通る浜街道に架けられた木橋であった。二代目は、昭和 29 (1954) 年に完成したコンクリート橋で、街灯のついた先鋭的なデザインの親柱を四隅に配していた。国道 250 号 (通称「浜国道」) として多くの車が行き交ったが、道路幅員わずか 5.9m で、大型車の通行増に伴い橋の高欄や親柱に車が接触して傷だらけに。昭和 37 (1962) 年、橋の上流側に新たに国道 250 号 (その後、明姫幹線開通により県道明石高砂線に) 千鳥大橋が架けられ、これに伴い高砂市に移管された千鳥橋は、県が高砂市から受託して架け換え工事を行い、平成 21 (2009) 年 10 月に竣工し現在に至っている。

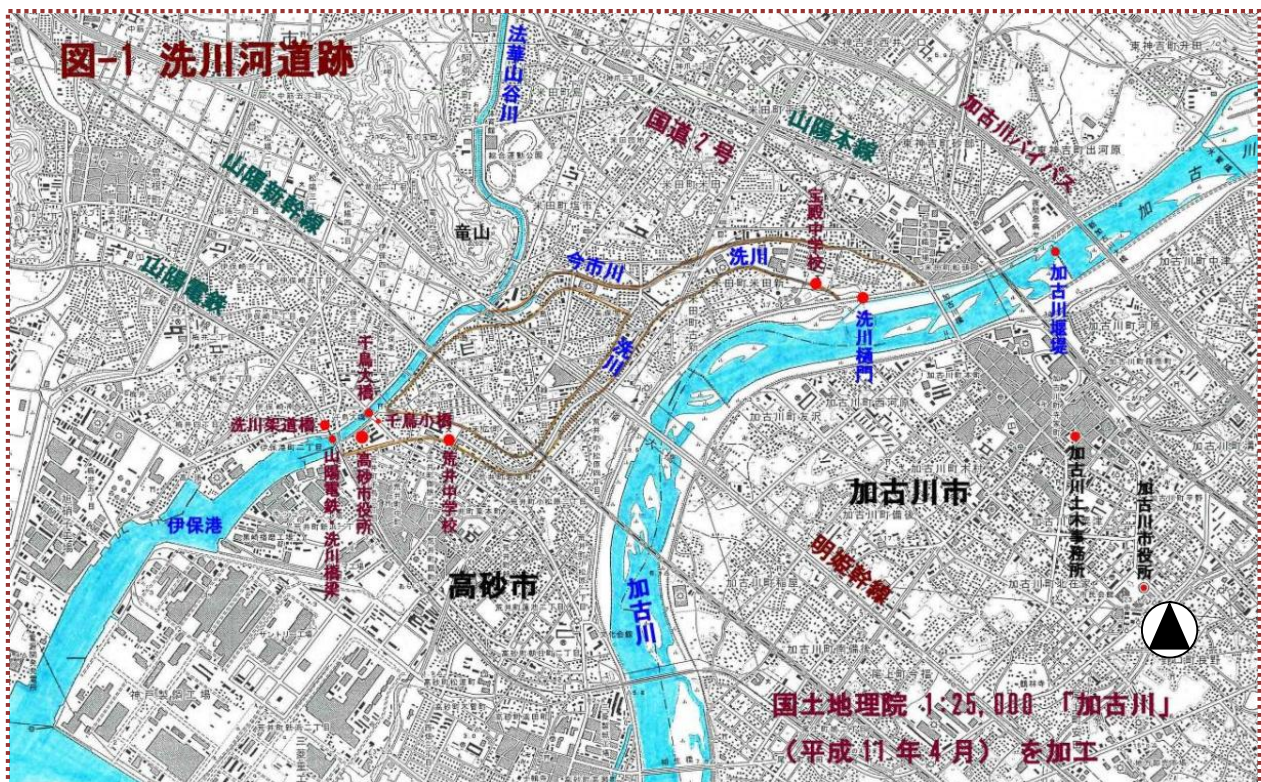
■ 洗川の流路はどれ？

洗川は、山陽道 (現・国道 2 号) の下流で加古川から分派して、分派点付近の川幅は 150m~200m もあったそうです。分派後、河道は二筋に分かれますが、二筋の内南側の流れが洗川です。では北側の流れは？いくつかの文献を読んでみましたが判然とせず、下表のように河川名も文献によってまちまちなので、本稿では下表の『加古郡誌』の呼称で統一します。

『加古郡誌』の「地誌」には、洗川は「加古川の支流にして印南郡米田村において分岐し、流末は荒井村の西方揖保港 (伊保港) に注ぐ、此の流程約一里十九丁 (≒6 km)、その支流を今市川という、印南郡に属せり。」とあります。

表-1 洗川の呼び方いろいろ

文 献 名	発刊年	根拠史料	史料の作成年	分岐前の河川名	南側分岐	北側分岐
『高砂市史～伊保編』	大正3年				洗南川	洗北川
『加古郡誌』	大正3年			洗 川	洗 川	今市川
『近世の高砂』	昭和46年	宝暦の川筋争い	宝暦年間(1751頃)	今市川	?	今市川
『加古川市史』第五巻	昭和62年	岸本家文書	明暦4年(1658)		今市中島川	?
同上		五ヶ井・新井掛り 村々溝手絵図	文化13年(1816)	加古川堀川	?	?
『高砂市史』第二巻	平成22年			堀川・西加古川	今市中島川	?



■洗川の名残り

「洗川」という河川名はいつごろから使われていたのでしょうか。明暦4(1658)年の岸本家文書(『高砂市史第五巻』)には「今市中島川」とありますが、享保8(1723)年に描かれた「形的組塩浜絵図」(『高砂市史~伊保編』)では「洗川」となっています。地域によって川の呼び名が異なることもあるので何ともいえませんが、江戸中期には洗川と呼ばれていたようです。

現在、洗川やその支川の今市川はほとんど埋め立てられ、小規模な排水路となって法華山谷川に注いでいますが、所々に「洗川」の名が残されています。

① 分派点に設置された「洗川樋門」

江戸時代、今市湊への舟運のため、川浚えをして洗川の舟路を維持してきましたが、明治22(1889)年に山陽本線が開通、大正2(1913)年に播州鉄道(現・JR加古川線)が開通し、輸送の主役は、舟運から鉄道に移り、加古川の舟運はその歴史に幕を閉じます。このような背景もあって、加古川改修工事では、派川・洗川は締め切って樋門(洗川樋門)を設け、平水量のみを通すことに。これが、洗川変遷のきっかけとなります。

この洗川樋門は、加古川堰堤で取水し堤外水路を流下してきた水を堤内に取り入れる役目を果たしています。取水目的は、農業用水、水道用水、工業用水です。

宝暦3(1753)年の古文書によると、米田町米田新で洗川筋から今市、中島(二ヶ井)が取水し、米田町古新で加古川筋から古新、小松原、荒井、高砂(四ヶ井)が取水していました。ところが、加古川改修工事において、東神吉村出河原地先に建設される加古川堰堤に両井堰の取水口を統合し、併せて堤外水路の新改築が行われることになったため、両井堰に合併の気運が生まれました。大正14(1925)年4月1日、二ヶ井と四ヶ井に米田町米田新を加えて合併し六ヶ井水利組合(現・加古川六ヶ井土地改良区)となります。

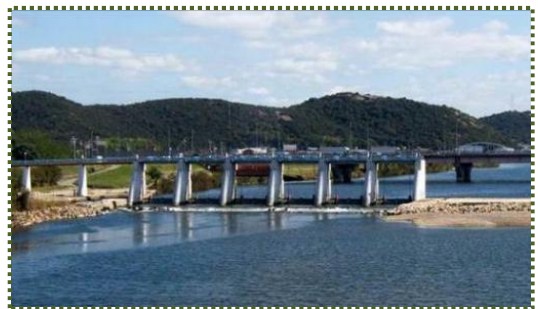


写真-2 加古川堰堤



写真-3 堤外水路 → 洗川樋門



写真-4 洗川樋門



写真-5 洗川樋門の堤内側

② 洗川緑道

洗川河道跡に建てられた荒井中学校の南東約200mの所に「洗川緑道」があり、入口には写真-6の銘板があります。この緑道は山陽新幹線まで約400m続くもので、高砂市アダプトプログラム事業のひとつとして、地元の若宮・緑丘両自治会が美化活動に取り組んでおられます。



写真-6 洗川緑道の銘板



写真-7 高砂市アダプトプログラムの表示板



写真-8 洗川緑道

緑道は名称からもわかるように洗川の旧河道で、地下には洗川雨水幹線のボックスカルバート(2500×2500)が通っていて、雨水は高砂市役所敷地内にある「荒井ポンプ場」から法華山谷川に放流されています。写真-1に、その放流口が写っています。

③ 千鳥大橋

『千鳥大橋』の親柱には、河川名として「洗川」の銘板が取り付けられています。この橋は、昭和 37（1962）年に竣工していることから、洗川水系洗川の時代に国道 250 号の橋として架けられたものです。（写真-1 参照）

④ 千鳥小橋

千鳥大橋の南東約 30m の所に、コンクリート桁橋があり、親柱には橋名として「千鳥小橋」、河川名として「洗川」と刻まれています。桁下に川はなく、橋を架設した後に埋め立てられたことがわかります。架橋時期は不明ですが、親柱や高欄の意匠が千鳥大橋のそれと同じなので、千鳥大橋とほぼ同時期に施工されたものと考えられます。

この千鳥小橋の南に高砂市役所があります（写真-10 参照）。昭和 28（1953）年に町村合併促進法が施行され、翌年 7 月に高砂町・荒井村・伊保村・曾根町の 4 町村が合併して高砂市が誕生しました。『高砂市史～伊保編』によると、「昭和 29 年に千鳥橋～天の橋（「天の橋」は荒井中学校の西約 50m の所にあった橋）間の洗川が埋め立てられた」とあり、『高砂市史第六巻』には、「昭和 32（1957）年河川敷地に新築された高砂市庁舎」の見出しが新庁舎の写真に添えられています。



写真-9 千鳥小橋



写真-10 千鳥小橋

近くの住吉神社で清掃活動をしていた地元のおじいさんが、「元々、この住吉神社の前が洗川やった。海の土砂を運んで来て埋め立てとったけど、地盤ははじめブカブカやった。市役所庁舎を建築するときの地鎮祭には、横綱の鏡里が来た。」と話してくれました。懐かしいですね。栃若時代の前の横綱です。

⑤ 山陽電鉄 洗川橋梁

神戸姫路電気鉄道（現・山陽電気鉄道）は、大正 12（1923）年 8 月 明石～姫路間を開業させます。この時に洗川（加古川水系洗川：現・法華山谷川）に架かる「洗川橋梁」（写真-11）も完成しています。

⑥ 山陽電鉄 洗川架道橋

山陽電鉄伊保駅の東端にある橋です。今は、周辺に多くの人家がありますが、大日本帝国陸地測量部が大正 12（1923）年に測量・作成した 1/25,000 地図を見ると、洗川がこの伊保駅辺りまであったようです（この時の洗川は、加古川水系派川の洗川です）。

鋼桁にはドルマンロング社（イギリスの大手製鉄会社で現在もあるようです）のミドルスブラ製鉄所製の鋼材を輸入し、大正 11（1922）年に神戸の川西機械製作所が橋桁を製作したと記されています（写真-13・14 参照）。



写真-11 山陽電鉄 洗川橋梁



写真-12 橋上は伊保駅ホーム

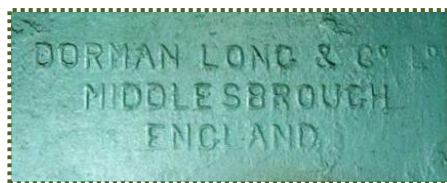


写真-13 DORMAN LONG & Co., Ltd.
MIDDLESBROUGH ENGLAND



写真-14 神戸 川西機械製作所
大正 11 年製造

⑦ その他

主要地方道 43 号高砂北条線には、「米田橋北」という交差点があります。米田橋は現存しませんが、米田交番があるあたりの洗川に架かっていた橋ではないかと思われます。洗川は、この米田交番の南西で二筋に分かれていました。

また、地図を見ると荒井中学校や宝殿中学校も一部洗川河道跡にあることがわかります。荒井中学校は昭和 22 (1947) 年 4 月開校、宝殿中学校は昭和 23 (1948) 年 6 月開校。Wikipedia には、宝殿中学校の運動場は、河原や深い沼地だった場所を、校区町民・育友会・教師・生徒が一丸となって整備したと記されています。

■ モノローグ

高砂市役所の西を流れる川は、加古川改修工事における洗川締め切りに伴い、加古川水系加古川の派川・洗川から洗川水系洗川に、さらに洗川の廃川・埋立により法華山谷川水系法華山谷川へと名を変えて現在に至っています。武庫川の下流でも、似たような話がありましたね。

ところで、二筋の流れのもう一方の川・今市川はどうなっているのでしょうか。現地を歩いてみると、MaxValu の所から上流が暗渠(高砂市の雨水幹線)になっていて、上部は市道塩市・宝中前準幹線道路(写真-16)が通っています。下流は開渠になっていて明姫幹線竜山(たつやま)大橋の直下で法華山谷川に合流しています。



写真-15 今市川の名残り



写真-16 市道塩市・宝中前準幹線道路

【参考資料】

- 1 『加古川市史～第三巻』 加古川市 平成 12 年 3 月
- 2 『高砂市史～伊保編』 高砂市郷土研究会 昭和 44 年 3 月
- 3 『高砂町史誌』 高砂町史誌編纂委員会 昭和 55 年 4 月
- 4 『加古川の流れ』 建設省近畿地方建設局姫路工事事務所 1975 年 1 月
- 5 『兵庫の河川～法指定の歴史(告示集)』 兵庫県土木部河川課 平成 4 年 4 月
- 6 『宝殿中学校、荒井中学校、山陽電気鉄道』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 26 (2014) 年 6 月 『ひょうご水百景』 No.37

改訂：令和 8 (2026) 年 4 月 『ひょうご水百景』 No.37